

副助詞 確認テスト（だに・すら・さへほか） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 ア（類推）／「光さえない山里で、まして人が訪ねて来るはずもない」。最も軽い「光」を挙げ、まして人など、と重い事柄を推し量らせている。下に「まして」があるのも類推の目印。

問2 イ（最小限の限定）／「せめて一目だけでも見たい」。「せめて」と願望「てしがな」に挟まれ、最低限これだけはと望む用法。

問3 ア（類推）／「水さえ飲ませず」。軽い「水」すら与えない、まして他は、という含み。文末が打消「ず」で、まして…の含意がある。

問4 イ（最小限の限定）／「せめて影だけでも見えたなら、慰むこともあっただろうに」。假定「ば」＋反実仮想「なまし」と呼応し、最低限の願いを表す。

問5 ア（類推）／「聖人でさえ過ちはある、まして凡人は言うまでもない」。「いはんや…をや」と呼応する典型的な類推。

問6 省略を補うと「いはんや凡人をや（＝まして凡人は言うまでもない）」。「聖人でさえ過つ」のだから、まして凡人が過つのは当然だ、という抑揚（よくよう）の構文。

問7 ア（類推）／「鳥の声さえ聞こえない深山」。軽いものを挙げ、まして人声など、と推し量らせる。

問8 ウ（添加）／「風が吹くと、波までも立って」。すでにある「風」に「波」を重ね加える添加。

問9 ウ（添加）／「雨が降り、その上 風までも加わって」。「雨」に「風」を添える添加。

問10 ウ（添加）／「親と別れ、そのうえ家までも焼けて」。不幸に不幸を重ねる添加。

問11 ア（限定）／「ただ月だけが昔のままの光であった」。「ただ…のみ」で「～だけ」と限定する。

問12 ア（限定。特に取り立てる用法）／「この子だけが、人にすぐれて賢かった」。多くの中からその一つを取り立てて限定する。

問13 イ（程度・おおよそ）／「三日ほど経って、手紙をよこした」。数量に付いて「～くらい・～ほど」の意。

問14 ア（限定）／「涙にくれて、ものも言えないばかりだ」。「～ばかりなり」で「ただ～するだけだ」と限定・強調する。程度から転じた限定の用法。

問15 イ（例示・婉曲）／「花などが散るころは」。「花」を一例として軽く例示し、言い方をやわらげる。

問16 ア（類推）／「名前さえ知らない草が」。最も基本的な「名」すら知らない、の意で類推。

問17 ア（強意）／「今ちょうど、月がたいそう明るいときに出た」。「し」「しも」は直前の語を強調する強意の副助詞。

問18 ②・④／②は「せめて一目だけでも」、④は「せめて影だけでも」。いずれも願望・反実仮想と呼応する最小限の限定。①③⑤は類推。

問19 「だに」と「すら」／古文の「だに（類推）」「すら」は現代語の「～さえ」にあたる。「さへ」は現代語の「さえ」とは違い「～までも（添加）」を表すので注意。

問20 (1) 光さえない山里 (2) せめて一目だけでも見たいものだ

問21 (1) 聖人でさえ過ちはある (2) 波までも立って

問22 文末には願望（～てしがな・～ばや・～なむ等）・命令・意志、または假定+反実仮想（～ば…まし）が来やすい。例文②は願望「てしがな」、例文④は假定「ば」+「なまし」と呼応し、「せめて～だけでも」の最小限の願いを示している。

問23 「だに」は軽いものを挙げて重いものを推し量らせる類推（～さえ）であるのに対し、「さへ」はすでにある事柄に別の事柄を重ねて付け加える添加（～までも）である。
